

welcome to the University in Ruins..



Vol.2
特集:After ...

contents. . .

ルー大生年代記

やって来た理事たち。

粉碎 たった一つの冴えたやり方

風景

「大学を見つめる人たち」

「「学主権」の発明に向けて
—琉球大学学生運動に触れて考えたこと—

占拠メシ



ルー級大学公認

【占拠時系列表】

by. モリータ

2008年

12月

- (15) 共通教育等新カリキュラム廃止要求文書を大学当局当てに提出
- (16) 岩政学長・平副学長・新里副学長からの解答文を受け取る
- (17) 「Jazz&キャリアパーリーAGAINST外国語授業削減@琉大図書館前」を開催

2009年

1月

- (19) 琉大当局による回答文への抗議文章を提出。1月26日までの返答を求めたが、当局からの解答は無し。

3月

- (9) 琉大図書館前占拠開始。占拠声明発表。タイムス、新報報道。
- (10) 理事たちが占拠テントをアポなしで訪問。そのためにお茶が出せずルーちゃん一同無念。
- (10) ジャズ研、ミッチー、DOYDOYによる夕方からのレイヴ！
ご飯ブログが始まる。
- (11) (12) しゅんぺーのブログ登場が頻繁になる。
- (14) 強風でテントが崩れかける、つてか崩れた。あわあわ。
- (16) ブラック・ブラダース占拠支援にあらわる。一週間記念ゆんたく・イン開催。
- (19) テントの中がカビ臭くなって来たので、とりあえず換気をよくして中のものを天日に干す。
- (23) 占拠開始から2週間が経過する。
- (25) 占拠deフリマ@占拠スペース開催。フリマ最高&再考。
- (30) 県議の比嘉京子さんが占拠テントを訪問。占拠から3週間が経過。
- (31) 猛烈な強風で、テントを一時畳む。

4月

- (8) ジャズとカレーの集い vol. 2 開催。テントを使った占拠はとりあえず休むことにする。
- (9) すきま通信vol. 1ができた。
- (10) テントがそっと片付けられる。ちょいと涙がちょちょぎれる。



やっ来た理事たち。

占拠宣言文を出した朝、実は理事たちがやって来ていた。彼らは何をしに、そして何を言いに来てきたのか…？その様子がここに記される。

3月10日午前9時頃、学生有志は教務課に声明文を手渡し、その数時間後に理事は占拠テントにやってきた。

まず話し合いは、理事の新カリキュラムについての説明から始まった。その内容はすでに知らされていたことばかりであったため、学生有志はもちろん理事の説明の節々で疑問を投げかけた。しかし、疑問を解消させる答えを一度たりとも返してくれなかった（というよりも質問に対して答えられなかったというほうが正確だろう）。

そんな理事達に対して、今度は学生有志から理事に対して学生の想いをぶつけた。なぜ新カリキュラムがいけないと思っているのかを、誠心誠意説明した。

理事にその想いをぶつけても、まるで真剣に取り合わない感じで、「へえーすごいですねえ」と適当な返事ばかりであった。新カリキュラムについて、学生にも講師にも議論する場を与えず、教育方針を決定していく理事。彼らは、それが教育現場にとってどんなメリットデメリットがあるのかなんて、検証などしていないだろう。「多くの学生はやる気がない」と言い切れるあたりに、検証もなく改革を進める理事の「思い込み」の強さ、危うさを感じた。

そして、用事があると言い去っていった理事達が訪れることは二度となかった。なぜ理事はやってきたのだろうか。自分は学生の意見を聞ける素晴らしい理事であると思うことで、自己愛を満たしたかったのだろうか。それとも、「学生の話聞いた」という事実が欲しかっただけなのだろうか。「決定したことだから撤回できない」と繰り返す、理事の姿が印象的であった。

by. under ground

粉砕

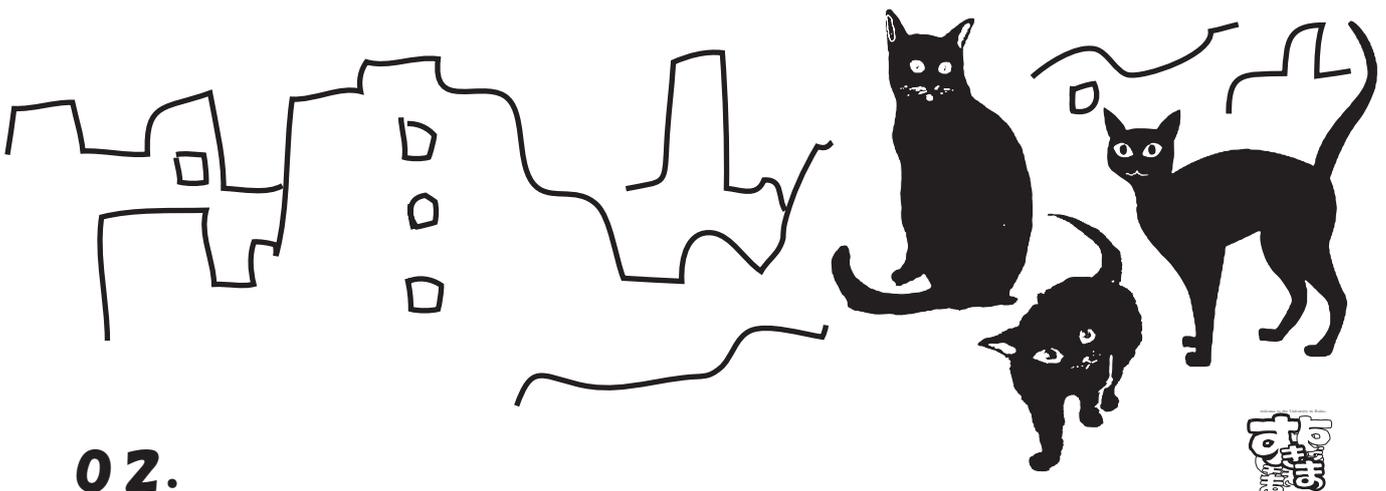
たった一つの冴えたやり方。

by. たちこま

新カリキュラムは断行され、学生有志による「占拠」はテントを畳んだことによって一旦は幕を閉じた。しかしこれは一時的な撤退にすぎない。もちろんこの先も新カリキュラム撤回まで／撤回後も形を変えながら抵抗は続く。新たな見通しを立てるためにもここで一度占拠について振り返り、評価と反省を次に活かす必要がある。「学生という主体を超えて問題を認識する視座、つまり学習権の侵害のみに固執することなく、言語教育を取り巻く労働の問題という認識を持った上で、廃墟と化した「大学」の再生を願いながら「ネオリベ大学！」と蔑んで言い捨てるのが、学生の作法」というのがしゅんぺーによる論考であった（詳しくは『すきま vol.1』を参照）。「学習権」に焦点を絞る戦略の結実として「占拠」という非制度的手段を実践した学生有志による今回のアクションは、いかなる意味付けが可能で、また何が限界であったか。さらに今後どのような抵抗のアクションが可能でありかつ有効なのかを考えていく。

市場の論理を持ち込んだネオリベ的な「改革」が大学で行われていることの矛盾は、本来大学が交換の論理に属さないことを考えてみればよく分かる。白石嘉治によると、大学のコンセプトを突き詰めて残るのは「言葉や感情の表現」ということになる。確かに大学でそれらを学び表現したとしても代わりに何かを失うということはない。本来そこは根本的に資本主義とは馴染まないし、手を携えてはいけない場である。表現の機会と場を奪い学生の学習権を侵害してまで経常させたい利益に、一体何の価値があるというのか。今回の「占拠」は、ネオリベの風が吹き荒れ廃墟と化したルー大において、資本主義のテリトリーとコードからずれていきながら、交換の論理の成立しないいわば残余のような空間が出来上がっていく過程であった。様々な物資や食糧の差し入れ、カンパの存在なくして一か月続いた占拠を語ることはできない。共通のissueを持つ支援者による見返りを求めない際限のない贈与が占拠空間に溢れていた。いまや駐車場の有料化まで目論むネオリベ大学ルー大において、その一角を当局にほとんど無視されながら座り続けた占拠ではあった。しかし、そこに生じた残余は確実に抗がりを見せている。その射程は軽々と大学を海外をも飛び越えていくほどに。思いもよらないところからの支援メッセージや、大量の書籍の贈与を受けるにつけ今回の占拠についての認識を新たにしていくのだった。「占拠」という極めて強いマスキュラな語から想像される他を寄せ付け閉じた空間はそこにはなく、集いたいものが集い自由に好きなことを語らう開かれた本来の大学の姿が現出していた。一時的な自律空間ではあったものの、資本主義的なエコノミーから外れたあるべき大学の姿を取り戻すことができたことは、一応の評価をしておきたい。一方で限界は、いちばん身近な学生、教員を巻き込みながらのスペクタクル化をなせなかったことだ。学生への積極的なオルグは意図して避けていたということもあるが、占拠テントの前を通りかかっても迂回したり、見ようともしない専任教員たちの意図的な無関心は異様という他はなかった。意志表明をしない。すべて保留の先送りにし事態の鎮静化を待つ。彼女／彼らにはその沈黙で守れる何かがあるらしい。他者の被る（人的）災難や苦痛への想像力の欠如は、もはや暴力と言ってもいい。自らのissueに連関させて考える当事者性の欠如は、知識人として死に体ですらある。ただ、このように専任を批判し他者化するだけではなにも生まれない。不毛に面倒な敵を増やすだけだ。学生、非常勤講師も含めいかに共なるものを創出し抵抗をスペクタクルなものにしていくかが今後の課題といえる。

新自由主義的な大学再編を強行する当局は、今年度から非常勤講師削減を狙った外国語科目削減に加え、半年で20単位以上の科目の履修を厳格に禁止すると言いだした。外国語科目と体育の単位を水増しし上限を厳しく定めることにより、提供する科目の削減を睨んでいるのだろう。この愚かな策定は新入生だけを対象としていないため、履修登録期間中のルー大では全学的に大きな混乱が起きている。ネオリベ的な価値基準を積極的に内面化する某新里副理事は大学を「デパート」と表現した。そのデパートは商品が不足しているばかりかサービスさえ劣悪なものだけれど。何かがおかしいと誰もが感じ始めている。この混乱と違和感に乗じ、さらに動きを劇的なものにしていくことは可能なはずだ。この廃墟と化したデパートを「大学」に取り戻すべく、あらゆるところから衝いていく。変革をさせないための変革が、「改革」という名のもとに破壊を伴いながら強行されようとしている今、叩けば埃どころか粉塵さえ巻き上がる倒壊寸前のデパートを粉砕することから始めなくてはならない。



私が占拠に加わったのは26日の深夜だった。ぶらりと丸腰で、灯りに誘われてまるで羽虫みたいにやって来たのであった。丸腰と言っても肩からは満腹のポストンバッグを下げて、両手は段ボールに塞がれていた。私は深夜の引越しをしている途中だった。占拠は引越しの中継地点にピッタリだった。しかしテントの中で数日過ごす内に引越しの中継地点としてよりも何だか面白い出来事として私の中に根付いていた。そして今文章を書いている。

到来より明後日、私は占拠が佳境に差し掛かっていることを知った。大きなテントを畳むどうする云々、というような議論がテントの中で飛び交っていた。私は議論を他所にコーヒーを啜っていた。啜りながら議論をする人もあったが私は啜りながら芝生の、図書館前の、法文の通り道の景色をぼんやりと眺めていた。見慣れている景色が違って見えた。この時私は理念とか目的とかよりも面白そうなものを垣間見た気がした。何がどう面白いのかはうまく説明できないが。

私にとって占拠はいつもと違った景色が見られるだけで満足であった。しかも二食コーヒー付きとあらば過剰なことである。少なくともハンストにはならない。こんなスタンスに「この腰抜け、きちんと非常勤のためにやらんかっボケェ！」と罵り心を持たれる方もいるかもしれないが、まったりしていても占拠は十分に占拠だった。色々な立ち位置座り位置があるから面白い占拠になり得たのだと思う。ありがとう、占拠。

by S S

「大学を見つめるひとたち」 新城郁夫 (guest)

占拠される大学。迂回路に入りこむようにして、いま私が思い起こしているのは、2004年8月13日のことである。この日、沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落炎上した。一報を聞いて駆けつけたとき、既に大学は、米軍とその米軍を守護する沖縄県警機動隊によって、占拠されていた。墜落直後、大学の柵を乗り越え、大学に隣接する普天間基地から多くの米兵が大学になだれ込み、硝煙をあげるヘリ機を嚴重に包囲し、大学敷地のあちこちを黄色のテープで切り分けていった。ライオットガンを装備した米兵たちによって、大学そのものが立入禁止区域とされ、完全に軍の制圧化におかれたその光景を目の当たりにして、もはやこれは大学ではないと、そのように感じたことを覚えている。

そのとき私は、速やかに進行する鎮圧にただ言葉を失うばかりだったが、周りにいた無数の人々もそうした衝迫にさらされているようだった。そこに集った人々は、それぞれがそれぞれの思いを抱え、あちこちで人山を築き、機動隊や米兵に直接に抗議し、携帯カメラで刻々と変化していく占拠の様子を写し取り、大学敷地内のあちこちから、この占拠をじっと見つめていた。そこには、大学を見つめている目があったのだ。

今となっては気づくのが、この時、米軍による大学の占拠という出来事のすぐ傍らで、別様の占拠が始まりつつあったということである。私もまたその一人であった得体のしれない人々が、立入禁止のテープをくぐり抜け、大学の各所に勝手に集散しては語り合い、声をあげ、あるいはただ沈黙して、米軍の無法を何一つ見逃すことのないよう凝視していた。占拠された大学を占拠し返そうとする実践がそこにはあった。そうした動きのなかで、「ここは私たちの場所だ」という抗議の声を聞いた。大学関係者ではない、見覚えのある一人の男性が、屈強そうな米兵にきっぱりと告げていた。その言葉が、大学を奪おうとする不正な力から大学を取りかえそうとする意志を、はっきりと伝えていた。そうした声のエコーが、今度の琉球大学学生たちの占拠のなかに、やはり確かに響いていると、私には感じられる。「ここは私たちの場所だ」

そう。ここは私たちの場所なのだ。私たちとは誰か。それは、知を求め、そのように知を求める誰かを求めて、大学に集う私たちのことだ。だから、私たちは、知を求めて大学にやってくる誰かをないがしろにしたり、知を求める誰かを求めて大学に集う誰かを傷つけるような、そのような力の侵入を、決して許しはしない。

今回、琉球大学が、非常勤講師切り捨てを狙った外国語コマ数大幅削減という不正極まりない策謀を示したとき、いち早く抗議の声をあげたのは、いつもはほんの少しボンヤリしているとも見えていた学生たちだった。決して多数ではなく、また、必ずしも押しが強いわけでもない彼女・彼たちの声は、静かだけれどしかし洗練された幾つもの言葉の束となって、大学に大学たることを要求するものとなっていった。その言葉は、不正な力が大学を占拠しつくしていこうとする今、いかにしたら、大学を私たちの場所として取り返すことができるかという、大学がいま最も大切にすべき問いかけとなっている。しかし、その問いかけに、琉球大学はいまなお全く応えていない。応えないだけでなく、応える必要をすら否認している。大学に大学たれという声に、大学が耳を塞いでいるのだ。いったい、大学は、誰のための場所なのか。

学生たちはその答えをとこの前から知っていた。「ここは私たちの場所だ」そのことを大学が知ろうとしないなら、あるいは、知ろうとしないことで大学が大学を不正に占拠していこうとするなら、大学は大学から奪還されなければならないし、そのことを通じて、大学を「私たちの場所」としていく以外にはない。

そうやって始まったのが、今回の「占拠」ではなかったかと、私は勝手に想像している。文字通り、数える程度しか占拠活動に参加できなかった私だが、占拠テントに顔を出すと、なんだかユルクてのんびりした空気が流れていて、奇妙な場所が生まれつつあることを感知できた。暮れ方の木陰のもとで、占拠メシの献立をめぐってささやかな討議が交わされ、夜ともなれば、沖縄とは思えぬ寒風に震えつつ、どのようにして暖を取るかについての「生の技法」をめぐり模索が重ねられ、昼には、けだるさのなかで様々な書物が読みかわされていく。そのような光景のなかで、大学たることを止めはじめた大学のなかに、始まりの大学とでも呼べるような時空が出現してきたことを誰が疑えるだろうか。学ぶ権利を主張し、市場主義的な人間の処分に断固拒否をつき返す学生たちの訴えは、どこまでも率直で、誠実だ。この誠実な訴えを、占拠テントという仮寓から発信しつづけている素敵な姿を、琉球大学関係者をはじめとする多くの人たちに見てもらいたいと、私は、はじめそう願っていた。しかし、そうした私の願いについて、「ちょっと違うのかもしれない」と私自身が感じるようになってきている。見られているのは彼女・彼たちではないのではないのか。見られることを通じて、彼女・彼らが、見ているのだ。何を見ているのか。大学を見ているのである。新たな躍動をもって大学が生まれ変わっていく時を待ちわびながら、大学が崩壊していこうとするその中心から、彼女・彼たちは、大学の始まりをじっと見つめている。



「学習権」の発明に向けて一琉球大学学生運動に触れて考えたこと 鵜飼哲 (guest)

学生が大学当局の語学教育のカリキュラム改革に異議を申し立て、非常勤講師の首切り、ポスト削減に反対して座り込みに入るといふ出来事が起きた今、私たちはみな、この闘争が可能だったことを知っている。しかし、70年代の学生運動を経験したのち、この20年大学の語学教師だった者として言わなければならない。こんな闘争が可能だとは、いままでは想像すらできなかったのである。

「一大生ブログ」で触れることのできた自然体の言葉たちの発信者である学生の皆さんからすれば、自分たちが当然のこととして開始した運動が、過去の運動経験者にはなぜ想像すらできないものなのか、それこそ想像に苦しむかもしれない。その理由を考えることを通じて、この運動の歴史的意義と、この運動によって垣間みられた大学をめぐる新しい闘いの思想を、その輪郭だけでも想像し、素描することを試みたい。時間が限られている関係上、以下二点にしぼり、簡潔に私見を綴る。

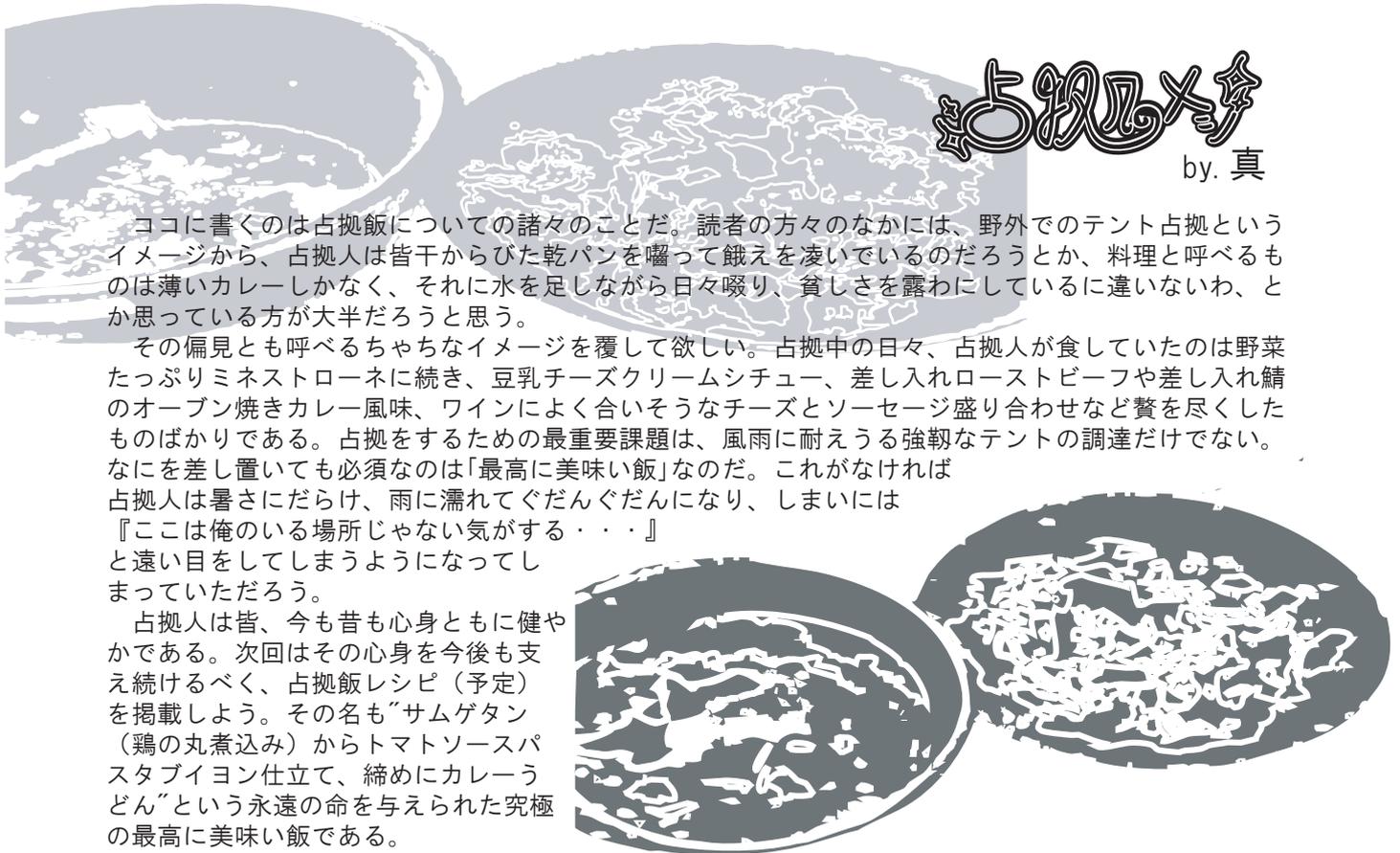
第一点。私が理解しえた限り、今回の闘争は学習権をめぐる闘争であるように思われる。より正確に言えば、「学習」および「権利」という概念の解釈をめぐる闘争ではないか。学生と大学当局がこのふたつの言葉をそれぞれどのような内実と広がり理解しうるか、その知的な力量が目に見える形で衝突する空間が発明されたという点で、全共闘運動以来40年ぶりに、大学はふたたび思想闘争の舞台になったと言える。

私がかかわった70年代関西の新左翼系学生運動は、いまだ全共闘運動の余波のなかにあった。全共闘運動は、大学をめぐる多くのラディカルな思考や行動を生み出しつつ、ひとつの極限で大学解体という理念に行き着いた。この理念の出現以後、大学内部で運動を継続しようとする者は、ある種のダブルバインドに引き裂かれざるをえなかった。琉球大学の運動が出現した今の時点から省みれば、私たちの運動は、大学で展開されながら、このダブルバインドをなかば無意識的に否認したために、「学習権」という概念に、新しい、積極的な内容を与え返すことができなかったのである。その結果この言葉は代々木系の運動の専有物となり、私たちのクラス入りやストライキは、学生の「学習権の侵害」として非難されることになった。

誤解や不適切な拡大解釈があれば指摘していただきたいが、「すきま通信」vol. 1に掲載された「問題の所在」（しゅんぺー署名）では、今回の運動が戦略的に「学習権」に焦点をしぼることで成立した事実が確認され、それとともに当局側によるこの権利の、在学生／新入生、学生／非常勤講師等を分断するような解釈に対する批判的分析が展開されている。この権利が個人としての学生の私利私害の単なる承認として、ブルジョワ的、さらにはネオリベラル的に解釈されるならば、この権利の別の解釈の可能性が閉ざされたままならば、この言葉は分断しか生まない。70年代に私たちがこの概念を、否定し切れないうまま警戒し、遠ざけざるをえなかった理由もそこにあった。しかし、「問題の所在」は、かつて私たちが否認することしかできなかったこの権利をめぐるダブルバインド状況を明瞭に見据え、そのうえでこの概念を積極的に変形する火急の必要を指摘し、そしてすでに、その変形の方角を示唆しているようにさえ見える。

第二点。今度は学生運動OBとしてではなく現役語学教員として。いまもフランス語一年の授業を終えたばかりだが、大学における語学教員の置かれている状況は二重、三重に厳しい。まず、語学以外の専任教員の大半は教養教育としての語学を道具的にしか位置づけない。また、学生の大半は語学の授業を単位を揃えるための不条理な苦行としか考えない。さらに語学教員の間でも、英語と第二語学の間、また第二語学のさまざまな語種の間で、大学の語学教育が置かれている状況についての認識には大きな隔たりがある。そして、大学のネオリベ化、国立大学の場合は独立行政法人化以後、非常勤講師の人件費は真っ先に削減の対象になった。従来に分断がいつそう凄まじく進行するこの状況を、なんとか変えなければならない必要は日々感じつつも、孤立無援の思いが深まるなか、反撃の機会を見いだせずにきていたのだった。

知的にも、そして社会的にも、最悪の破局を間違いなく招き寄せるにきまっている-そう、アフガニスタンとイラクにおける戦争と同質、同程度の-愚かなカリキュラム改革を阻止できず、いったいなんのための語学教師か。そんな内向する怒りに苛まれていたところへ、琉球大学では学生が、語学教育のカリキュラム改革と非常勤講師削減に反対して立ち上がったのである!この間東京で何人かの友人と話し合う機会があったが、そんな運動がどうして可能になったのか、みな首を傾げるばかりだった。しかし、これほど喜ばしいことはない。さしあたり私は、今回の運動では大学院生が、大衆としての学生に対するある種の「有機的知識人」として機能し、「一時的自律ゾーン」(ハキム・ベイ)の発明に至ったのではないかと想像しているが、運動の理念、感性、経緯、形態等、よりくわしく学ぶことのできる機会を心待ちにしている。



ココに書くのは占拠飯についての諸々のことだ。読者の方々のなかには、野外でのテント占拠というイメージから、占拠人は皆干からびた乾パンを嚙って餓えを凌いでいるのだろうとか、料理と呼べるものは薄いカレーしかなく、それに水を足しながら日々啜り、貧しさを露わにしているに違いないわ、とか思っている方が大半だろうと思う。

その偏見とも呼べるちやちなイメージを覆して欲しい。占拠中の日々、占拠人が食していたのは野菜たっぷりミネストローネに続き、豆乳チーズクリームシチュー、差し入れローストビーフや差し入れ鯖のオープン焼きカレー風味、ワインによく合いそうなチーズとソーセージ盛り合わせなど贅を尽くしたものばかりである。占拠をするための最重要課題は、風雨に耐えうる強靱なテントの調達だけでない。なにを差し置いても必須なのは「最高に美味しい飯」なのだ。これがなければ占拠人は暑さにだらけ、雨に濡れてぐだぐだんになり、しまいには『ここは俺のいる場所じゃない気がする・・・』と遠い目をしてしまうようになってしまっていたらう。

占拠人は皆、今も昔も心身ともに健やかである。次回はその心身を今後も支え続けるべく、占拠飯レシピ(予定)を掲載しよう。その名も“サムゲタン(鶏の丸煮込み)からトマトソースパスタブイヨン仕立て、締めのカレーうどん”という永遠の命を与えられた究極の最高に美味しい飯である。

発行日：2009. 4. 23

発行元：ルー大生有志

ルー大生ブログ

※ブログもみてちょ(^v^)=> <http://loudaisei.seesaa.net/>

